

New American Gothic. By Irving Malin.
Carbondale, Ill.: Southern Illinois University
Press, 1962.

岩山太次郎

本書は新しい Gothicism の理論の研究書でもなければ、新しい Gothic novel と18世紀後半から19世紀にかけて発達した小説の一形態である Gothic romance との比較研究の書でもない。著者 Malin は、現代のアメリカの小説家6名——Truman Capote (1924-), James Purdy (1923-), Flannery O'Connor (1925-1964), John Hawkes(1925-), Carson McCullers (1917-), J. D. Salinger (1919-)——の作品を考察し、その中にある大きな特長として Gothic の要素を見出し、彼等の作品を New American Gothic と名づけているのである。従って、新しい American Gothic 全般を対称としているのではない。

元々、Gothic novel とか Gothic romance という小説形態の名は、Horace Walpole の *Castle of Otranto* (1764) や Ann Radcliffe の *The Mysteries of Udolfo* (1794) や Matthew Lewis の *The Monk* (1796) を祖とするものに対してつけられたものである。それらの物語は秘密の抜け道や土牢のある中世の城を舞台として、幽霊が出没するような陰鬱な超自然的雰囲気を持ち、読者に恐怖心をおこさせるものである。アメリカでは Philip Freneau の長篇詩 *The House of Night* (1779) を祖として、Charles Brockden Brown や George Lippard の作品がそれに続いてあり、更には、Nathaniel Hawthorne や Edgar Allan Poe, Ambrose Bierce, Henry James にもその要素は見られる。この Gothic という言葉は Melville の *Pierre* や Faulkner の *Absalom, Absalom!* などにも適用されているように、Radcliffe の作品よりも、もっと広い意味を次第に帯びようになり、しばしば暴力、神秘、非現実的でありそうもないこと、病的な情熱、あらゆる種類の誇張された複雑な文体を意味するというようなルースな意味に使われることもある。(cf. Richard Chase: *The American Novel and Its Tradition*, New York: Doubleday Anchor, 1957).

しかし、Irving Malin は真の Gothic の特長は、本質的に subjective なものであり、現実を“distorted mirror”として描くことにあると考えている。そして、それはあくまで現代の生活の本質的な状態を描くものでなければならぬのである。必ずしも幽霊の出る城や森を舞台とする必要もなければ、超現実的物語で読

者に恐怖を惹きおこさせるものである必要もない。従って新しいアメリカの Gothic は過去のアメリカの Gothic とはかなり違った面を強くもっているのである。過去のアメリカの Gothic ではナルシズムを強力にうちだしていたが、新しい Gothic の登場人物たちはナルシズムをそのように力強く表面へ出すことはしない。彼等のナルシズムは人間の社会を破壊する試みであり、それによりプライベートな世界に自分たちを押しやり、その結果自分たちを他から全く絶縁しているのが、最も大きな特長である。

そのため現代の Gothic は必然的に心理的なものとなり、一つの大きな社会集団ではなく家庭がナルシストたちの結合の場となり、自己意識が自己を孤立化させて、家庭が牢の役割をはたし、旅に出ることがそこからのエスケープとなっている。

John Aldridge が、Truman Capote の作品にみられる Gothicism は非常にプライベートな世界の上にあるものであるから普遍的な生を描いてはいないという批評をした (*After the Lost Generation*, New York, McGraw-Hill, 1951, p. 195) ことに対する反駁から Malin は上のような自分の説を展開する。Malin によれば、社会が現実であるのと同じように、アイソレーションも現実に外ならないと言う。新しいアメリカの Gothic で登場人物たちが自己意識のために自己の内にとどまるのもそれは現実についての一種の判断なのであると主張する。又、現代の社会において自己の内にとどまることが一体それほど珍らしいことであろうか？ 登場人物たちは、いや我々すべては、自我と超自我の間の、自己と社会との間の精神的緊張を自覚しているからこそ、自己の内にとどまらねばならなくなるのである。彼等こそ心理的な闘争の場を我々に示してくれるものである。その闘争は個人個人の闘争であっても、決してプライベートにとどまるものではなく、普遍性をもつものである。現代の社会それ自体が“disorder”であるから、普遍性をもつためには、必ずしもマクロコズムを必要としないのである。マイクロコズムにこそそのような埋れた人間がいるのである。マイクロコズムの場は、平和な時代の軍隊のキャンプでも、63番街の一軒の家でも、セントラル・パークでも充分なのである。現代の社会ほど“disorder”な社会はなく、その社会の一マイクロコズムを描く新しいアメリカの Gothic はこの点では“poetry of disorder”である。即ち、Poe 的なものであり、W. D. Howells とは正反対のものである。

どのような特長が社会のこの“disorder”の中にあ

るかについて、Malin は三つの要素をあげ、それらを6人の作家の数多くの作品で具体的に検討している。まず第一にあげているものは、“self-love”である。これらの作家の作品の典型的な人物たちは皆弱虫である。自分を常に苦しめる不安からのがれるために、混乱から秩序を創造するために、自己を愛する。そして彼等はナルシストになることによりモンスターになろうとするのである。古くは *The Blithedale Romance* の Hollingsworth もそうであったし、*Moby-Dick* の Ahab もそうである。しかし、古いアメリカの Gothic と新しいアメリカの Gothic の違う点は、前者のナルシズムには力強さがあったが、後者では *Wise Blood* (O'Connor) の Hazel Motes にみるように、いかにしても Faust 的にはなれないのである。

第二の特長は家庭である。そこで人々はゆがめられた愛を学ぶのである。親たちは自分たちの子供の中に自分たち自身を見るが、若者たちの自己表現の性質を知らないか或は忘れていて、彼等のまだ十分に発達していないパーソナリティーを真似ようとする。一方、子供たちは、ゆがめられた社会の中で自己を見出し愛することの必要なるがためにナルシスティクになる。このような家庭こそ社会のマクロコズムであり、プライベートな世界と社会との、自我と超自我との闘争のドラマの場となるものである。このような意味で「家庭の恐怖」をこれら6人の作家たちは多くの作品で取扱っている——*The Heart is a Lonely Hunter* (McCullers), *Other Voices, Other Rooms* (Capote), “Uncle Wiggily in Connecticut” (Salinger), “Color of Darkness” (Purdy), *The Violent Bear It Away* (O'Connor) がそのよき例である。

第三の特長としあげているのは、これらの作家たちは、アイディアによるよりも更に多くイメージによって作品を展開している事実である。そして、イメージによって作品を展開する場合に三つのイメージ——化物屋敷と森への旅、自己のゆがめられた映像——がよく使われている。これら三つのイメージがナルシズムのゆがみと家庭での闘争のシーンを提示しているのである。化物屋敷は、そこにナルシズムを閉じ込める世界のメタファーである。*The Members of the Wedding* (McCullers) の醜い台所がそうだし、*The Ballad of the Sad Café* (McCullers) のあの sad café も、*The Cannibal* (Hawkes) の下宿屋も、63: *Dream Palace* (Purdy) の63番街の家もそうである。

しかし、登場人物たちはそのような閉じ込められたナルシズムの世界から、外の世界へのがれようとする。

これが旅のイメージであるが、こののがれようとする旅にすら不安はいつもつきまわっている。*Other Voices, Other Rooms* の Joel Harrison Knox は *Skulley's Landing* からののがれようとするし、*The Members of the Wedding* の Frankie Addams は結婚式のメンバーの一人になろうとする、又、*Malcolm* (Purdy) の主人公 Malcolm もホテルを出ようとする。多くの登場人物は現在の自己がおかれているところから出ようとするが、家庭に、或は現在の場に留まっているのと同じように、閉じ込められた世界からののがれ出ることも彼等には危険なことであり、彼等の旅は必ず失敗に終わっている。

又、これらの作品では、夢の中でのように、自己のゆがめられた映像がよく出てくる。*Other Voices, Other Rooms* で Capote は “It was as if he lived those months wearing a pair of spectacles with green cracked lenses.” と書いているし、*The Ballad of the Sad Café* の Amelia の眼はひどく内側に向いていてどうしても焦点があわないし、Seymour Glass (Salinger) は “clouded vision” をもっている。McCullers には *Reflections in a Golden Eye* というタイトルの小説があるほどである。何故これらの作家がゆがめられた映像を使うかといえば、この映像こそ、二重映しになった現実、罅の入った現実、常に揺れ動く現実を映したものに他ならないからである。

このように Malin は6人の作家の個々の作品から、それらがなぜ Gothic であるかという根拠を引きだして論じており、なかなか興味ある分析を行っている。彼は新しいアメリカの Gothic の評価を行うと同時に、想像的な文学がその時代の意識の指針であるとするならば、我々に現代を理解させる助けをも行っているといえよう。(ただ一つ疑問に思われる点は、“Conclusion” と名づけられた最後の章で、Mallin は6人の作家の文体を論じているのであるが、文体というものは作品の内容と分離して別個に論じられるべきものではなく、筆者はこの章には同意出来ないし、その章がどのように本書の他の章と関連づけられているのかも理解出来ない。)

本書は Harry T. Moore の編集による “Crosscurrents: Modern Critiques” の一冊として出版されたものである。この叢書は既に十数冊刊行されていて、“Twentieth Century Views” (Prentice Hall, Series Editor: Maynard Mack) や “Twayne's United States Authors Series” (Editor: Silvia E. Bowman), “University of Minnesota Pamphlets on American

Writers" (Editors: William Van O'Connor, Allen Tate & Leonard Unger) とともに興味ある叢書である。

著者 Irving Malin は現在 City College of New

× × × × ×

E. P. to L. U. Ed. by J. A. Robbins. Bloomington: Indiana University Press, 1963.

Ezra Pound. By William Van O'Connor. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1963.

Ezra Pound. Ed. by Wolter Sutton. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1963.

The Confucian Odes of Ezra Pound.

By L. S. Dembo. Berkeley: University of California Press, 1963.

児玉実英

1946年2月14日の *New York Times* は、ワシントンからの報道をこう伝えている。

「連邦地方裁判所陪審員は、国外追放者・詩人、Ezra Pound (60才) が精神的に不健全であることをみとめた。戦争中、イタリアにおける彼の文筆活動、およびラジオ放送により問われた、大逆罪の公判に立つことから、この評決は、Poundを救うことになった……」

Frost や Joyce や Eliot を「発見」し、Yeats と並んで現代詩の基礎をつくったアメリカ生まれの今世紀の大詩人といわれ、東洋に関心を持ち、俳句の理解からイマジズム運動をおこし、つづいてヴォーティシズムをおこし、常に新しい芸術運動の最先端に立ってきたといわれる Ezra Pound は、第二次世界大戦中イタリアからアメリカを批判する短波放送を行ったため、戦後アメリカに連れ戻され、大逆罪に問われたのであった。しかし、1945年12月14日、公判に先だて、聖エリザベス病院 (ワシントン D. C.) の四人の医師は、Pound が「公判に立つには精神的に不適であり、療養の必要がある」という報告書を裁判長あてに提出していたのである。評決の結果、Pound は「入院」することになった。しかし1949年、入院中に出版された詩集 *The Pisan Cantos* にはポーリングゲン・プライズが与えられ、また、まもなく Frost などを発起人とする一大釈放運動が展開され、1958年、Pound は「退院」が許可され、再度イタリアに渡っていったのである。

その後 Pound にたいする関心はますます高まりを見せ、Pound 自身の書いたものを含め、20冊をこえる単行本が、この数年間に新しく出版された。おび

York で英米文学を講じており、著書には *William Faulkner: An Interpretation* (1957) がある。

(同志社大学文学部助教授)

ただしい数にのぼる Pound に関する論文は、その研究の急速な進展をものがたる。今ここでは、一昨年 (1963年) 出版された上記4冊の単行本をとり上げることにする。

J. A. Robbins 編著 *E. P. to L. U.: Nine Letters Written to Louis Untermeyer by Ezra Pound.* 本書は副題にもあるように、Louis Untermeyer (一昨年北京アメリカ研究夏期セミナー文学部門の講師として来日した詩人・評論家) にあてた Ezra Pound の書簡を集めたものである。384通の Pound 書簡を集録した D. D. Paige, ed., *The Letters of Ezra Pound* (London: Faber and Faber, 1951) にくらべ、わずか9通の手紙ではあるが、これを supplement するものでもあり、また中には、貴重な内容をもつものも含まれていて、Pound 研究家には欠かすことのできない資料を提供している。第1の手紙は、1914年1月8日付けロンドンから書かれ、Pound の詩集 *Riposte* の書評に関すること、シカゴの *Poetry* 誌 (Pound はその *Foreign Correspondent* であった) の評価、Yeats との2ヶ月間の田園生活、Fenollosa の遺稿の整理 (漢詩と能の英訳) にたずさわっていること、などにふれている。第2、第3書簡は、1929年末から1930年にかけて Rapallo において書かれ、旅館の事情などを書き送っている。(Rapallo はイタリアのリヴィエラにある小村で、Pound は、Hemingway とパリからイタリア旅行をしたのが動機となって1924年以後ここに住んでいた。) Untermeyer は、Pound をたずねるつもりだったのであろう。第4書簡は、よろこんで食事とともにすることを承諾する短かい手紙である。

最も注目に価するのは第5書簡である。これは、Untermeyer が編集していた *Modern American Poetry* にたまたま話題がおよんだ時、Pound が、「事実をはっきりさせるため」に、タイプライターに向かってうちはじめた、短かい自伝の長い手紙である。作者が作者自身をふりかえり、評価している意味で、自伝的作品のすくない Pound の研究には得がたい資料である。たとえば Pound は、自分の学歴について、1901年 University of Pennsylvania に入学し、1903年 Hamilton College に移り、1905年 University of Pennsylvania の大学院にはいったと記し、University of Pennsyl-